寄附帳

荒木又右衛門銅像建設後援會

荒木又右衛門像

鳥取縣受保第七、九八〇號

鳥取市東町八十番地

松田秀彦

外二名

大正十四年十月三日附願寄附金募集ノ件認可ス但シ左記條件ヲ遵守スヘシ

大正十五年一月八日

鳥取縣知事　白上佑吉　印

記

一　募集ニ着手セムトスルトキハ募集從事者連署ヲ以テ豫メ募集

一　地所轄警察官署ニ届出ヘシ
募集期間滿了後ハ三十日以内ニ募集金額收支明細書ヲ提出スヘシ

建設趣意書

荒木又右衛門先生銅像建設に就いて

荒木又右衛門先生は寛永時代の英傑でありまして、其事蹟は演劇に講談に、善く世に知られて居ますが、彼は徒に一世の豪勇であつたばかりでなく、其義俠に於ても誠に憬慕すべき偉人であつたのであります。

現時思想界の渾沌たる我國の社會狀態は誠に痛嘆すべきことで、是が善導に就いては識者が種々考慮を煩して居る所でありますが、要するに、義勇奉公の觀念が、各人の腦裏に確固と存して居れば、決して現代の樣な浮薄なる外來思想に衝動せらるゝものではありません。そこで吾人は特に往時の武士氣質の皷吹を唱導したいのであります。一体この武士氣質とは、

君國のために盡すのは勿論、學を修め、武を磨き、義に勇み、仁に富む俠的精神を謂ふのであります。

その典型として、吾人は荒木又右衛門先生を推奨するのであります。而して聊にても國民

思想の義俠的氣風に善導せらるゝ一資料たらん事を希ふのと、又此武勇の士の偉を永遠に忍ぶべき記念とせんが爲めに、地を其の因ある鳥取市久松遊園地内に卜し、其の銅像の建設を企圖した次第であります。

此擧は今を去る事二十年前、或人が企てたのですが、不幸にして其目的が達せられず、今日に至つたのであつて、誠に遺憾に堪へない次第であります。

そこで今回不肖等微力をも顧みず、之が發起となりて、前人の素志を繼ぎ、此目的を貫徹したいと思ふのでありますが、かゝる大事業は、廣く大方各位の御賛同を得なければ、到底其の成功を期せられないのであります。

希くば其の意のある所を諒せられて切に御援助の榮を賜はりて、吾等の企劃を大成せしめられんことを、懇願の至りに堪へません。

大正十三年三月　日

荒木又右衛門略傳

附銅像建設趣意書

荒木又右衛門の略傳

『伊賀越仇討』によつて、其名天下に隠れなき荒木又右衛門は其先を荒木攝津守村重といひ、その幾代かの後裔に荒木十郎左衛門と云ふ人があつて、伊賀國山田郡荒木村に鄕士として住んで居た。又右衛門はその長子で、幼名を岩之助と呼び、後保和と改め、通稱を又右衛門と云つた。

又右衛門の生まれた時代は、天下擧つて武藝にのみ打傾き血腥き殺伐の風が吹きしきつて居つた。慶長己亥四年。秋も漸く去らんとする九月の中旬であつた。

その頃此草深き荒木村に山村勘左衛門と云ふ世を忍ぶ軍學者があつたので、岩之助は長ずるに及んで、此を師として文武の敎を受けたが、天禀の氣才と、その修養の功とが顯はれて、十三才の頃には早くも非凡の手腕を認めらるゝ様になつた。

岩之助　十四才の時、この荒木村から程遠からぬ南都に、寶藏院流の槍術で名高かつた覺禪坊と云ふ人の門に入つた。そして日夜練武に心を碎いて居るうちに、早くも四年の歳月は流れた。翌れば元和三年、師の坊の許を得て、當時、海内に武藝の棟梁と仰がれて居た

柳生但馬守宗矩先生に師事して、拮据十年、深く武道の薀奥を極めたので、其手腕は師の肩を摩する位に上達した

斯くて又右衛門の名聲が師の名について喧しくなつたのは、寛永の初め頃からであつた。そして寛永二年の冬、彼二十七歳にして柳生の門を辭し、尙も武藝修業の爲め諸國遍歷を志したのである。

其の後の又右衛門の武藝に關する逸話は澤山あるが、其は廣く世に知られて居るので之を省き、爰には彼が義によつて立つた有名な伊賀越仇討の眞相を、述べる事にする。

元來この仇討は、演劇や、講談には、何れも種々と脚色されてあるので、事實とは大いに相違して居る。以下記述する所は、其の當時又右衛門が手記したと言ひ傳へられて居る報讐錄から、拔萃したのであるから、誤謬が少ないと信ずる。

又右衛門は武藝修業の爲め諸國を經廻つて後、舊誼を重んじ、大和國郡山の城主松平下總守に仕へ、秩錄五百石を食んで一藩の劍道師範と仰がれ、多くの藩士を敎導して居た。その中緣あつて、備前岡山の藩士、渡邊數馬（初代數馬）の長女梶を娶つて一女を擧げた。（又右衛門は不幸にして男子なく此一女のみであつた）

この初代數馬には三男、二女があつて、姉は荒木又右衛門に、妹は同藩澤治右衛門に嫁した。そして長男を源太郞（夭折す）次男を作十郞（二代目數馬となる）三男を小才治（元服の後源太夫と稱した）と云つた。この二代目數馬と源太夫とが敵討の起因者である。

さても備前岡山の宰相、松平宮內少輔源忠雄卿徒然の御慰にとの思召で、町家に躍の催しを申付けられた。

時は寛永七年七月二十一日の蒸暑き夏の夜、所は城の追手であつた。

『今宵の躍は上樣御所望。御慰に適ふやう躍つて躍つて躍りぬかう。』と、町家の者は老いも若きも、思ひ〱に今宵を晴と美を盡し、技を競うて鼕鼓の音、節面白く躍り廻り、城下の四民、皆その大平の歡樂に醉うて居つた。

丁度その時、藩士河合又五郞は家來を引連れ、豫て熟懇であつた內山下　の曲輪、南中の御門下の邸であつた同藩の渡邊數馬の玄關を訪づれた。『數馬殿御在宅か。又五郞御意得たい。』と申入れたが、生憎、その夜數馬は岳父、津田豊後の邸へ行つて不在であつた。弟の源太夫は病中ながら出迎へ、心置なき間柄とて、巳が病室に案內した。それから稍半時ばかり經つて、甲高き罵り聲が源太夫の病室に聞ゆる　間もなく狼藉の物音が靜かな家內に

響き渡つた。それはどういふ事の間違か、又五郎主從四人で、病める源太夫に四個所の深手を負はせ、其場に脇差の鞘を落したまゝあわてふためき、門外へ逃げ去つた。

このけたゝましい物音に、門長屋に病んで居つた、數馬の家來岩佐作兵衛は何事ならんと、胸とゞろかせ、已が病も打忘れて、有りあふ手拭を帶となし、脇差ばかりさして慌しく駈出して見た。

するとその吶嗟、表路地の內から、白帷子を着たものが二人、拔刀のまゝ、急ぎ足で出て來たのと出會した。『曲物待て、武士の邸に拔刀などとは不作法千萬、何奴なるぞ、名を名乘れ。』と、作兵衛は切つて捨てんと、刀の柄を握りしめつゝ大聲で叱咤した。

折柄其夜、數馬の長屋に居合せて居つた、徒目附衆、遠山才兵衛が、この高聲を聞つけ唯事ならじとその場へ駈けつけた。すると曲者は一目散に門外に逃げうせうとする。『已れ卑怯者』と、才兵衛、作兵衛兩人は。その跡を追ひ一人を打留たが、他の曲者は拔刀を打捨てたまゝ、闇にその姿を消してしまつた。その瞬間作兵衛は『もしや源太夫樣の御身の上に。』と云ふ事が頭に浮かんだので、急ぎ書院の方へ取つて返した。……が……その時はもう遲かつた。源太夫は既に全身朱を浴び、早や知死期の片息であつたが漸く、苦痛を忍び息も切れ〴〵に、

「オゝ作兵衛か無念至極。敵は河合又五郎と、兄上に傳へてくれ。」と僅かに言ひ遺して、そのまゝ、悲慘な最後を遂げてしまつた。

やがてこの騷ぎがすぐ間近に享樂に熱狂して居つた躍子達に知れ渡ると、

「それ御家中同志の喧爭だ切合だ。近寄つて怪我すな。」とどよめき合ひ、皆我先にと雪崩を打つて、家路へと急だ。斯くて此夜の歡樂も此の騷動のために打消されてしまつた。

この時まで數馬は、斯くとも知らず、岳父津田豊後と座談に打興じて居つた。そこへ作兵衛が宙を飛んで源太夫の凶變を注進に及んだので、數馬はそのまゝ已が邸へも立寄らず、豊後と共に又五郎の父、河合半左衛門の邸へ迫つた「門番衆、大事出來。渡邊數馬、急ぎ半左衛門殿に對面得たし、とく開門賴み入る。」と、息はづませて申入れたが、半左衛門は既に騷動を聞き知り、斯くあらんと門を閉ぢて入れない。數馬の眼は見る〳〵內に血走つてきた、そして刀は鞘を離れた。「か程申すに、御開門なくば、押しても通る。」と、豊後と共にいきまく所へ、藩の家老荒尾志摩、番頭加藤主善が早馬で駈けつけて來た。

「渡邊、津田の兩所、暫く待たれよ。一時の怒に身をあやまるまい。御心底の程さこそと察

するが、今夜は先々隱便に私宅へ引取られよ、半左衛門事は我等兩人確と御預り申せば、追て何分の主命あらん。」も猛ける兩人を說き伏せて、無事に引取らせてしまつた。

その翌日、主命によつて半左衛門は藩士菅權之助に身柄を御預けになり、又五郎は在所知れ次第、召して切腹仰付らるゝ事となつた。

一体、この河合半左衛門は池田家譜代の家來ではない。もとは安藤對馬守に仕へて劍道の師範をして居つたのである。所がある雨の降る日、登城の折柄安藤家の玄關前で、同藩の伊能五郎衛門と、傘が當つたとか觸つたとか僅かの事が、爭のもとゝなつて、終に伊能を斬殺してしまつたので、其塲に居合せた藩士の面々は大に彼の無道を憤つて。

「それ河合を討ち取れ。」と、いきまいて玄關へ飛び降りた。それと見るより半左衛門、こは、かなはじと、拔刀をさげたまゝ門外へ迯げ出した。恰度その時に、宰相殿(忠雄卿)が其所を通行して居られたので、その供勢の中へ飛び込みさま、

「御見掛申して御願申す何卒御助け下されませ。」と御乘物間近にひれ伏した。

「御見掛申すといふからは、予の家を見込での事であらふ、仔細はわからぬが、先づ同勢の中に伴れ參れ。」と下知があつたので、そのまゝ伴れ歸つ後、改めて安藤家に掛合つて半左衛門を貰ひ受け、御家中の班に加へられたのである。かく深き君の御惠を蒙りながら此半左衛門、性格極めて老猾な奴であるから、君の御意に反き、騷動の夜密に罪人の又五郎をば、當時幕府から池田家に御預けになつて居た旗本の山野邊右衛門の宅へ忍ばせて置き、其後人知れず岡山の城下を出奔させ、江戸の旗本安藤治右衛門の處へかくまつて貰はした。これは山野邊と安藤とが同じ旗本同志の間柄故、斯くは氣脈を通じたものである。

諺に隱すより露るとか。實に此事の眞相が間もなく宰相殿に知れたので、さても不屆な所業と早速安藤方へ又五郎の引渡方を交涉せられたが「かりにも御直參の旗本が武士氣質を以て一旦引きうけた限りは金輪際御引渡し仕らぬ。」とどうしてもそれに應ぜぬので、宰相殿は日頃御邸へ出入する旗本久世三四郎阿部四郎五郎、に事情を分けて懇談せられた。すると兩人は、

「御聞及の如く我等仲間、治右衛門事、性來なか〱以てのすね者。武士の意氣地を楯に懷の窮鳥、よもすなほには放ちますまい。是非にもと御所望ならば、先づ半左衛門を御渡あれ、さすれば又五郎奴は、安藤に申聞け我等兩人誓つて御引渡し仕る。」と、言上したか。宰相殿は彼等の心意を計り兼ねて、不安に思はれたので「御許等、確とその言葉に。」とか

へす〴〵の念を押された。すると彼等は『見事誓紙でも。』と口を揃へて誓つたのである。そこで誓書を入れさせて、堅き約束のもとに、半左衛門を江戸に護送して、彼等に手渡したが、さて誓紙は反古になつてしまつた。

宰相殿は約束通りに、又五郎を送つて來る日を待つて居られると、その期待は裏切れて幾日かの後、

『御約束の又五郎引渡の儀、我等仲間に聞くに、そは以ての外、一旦武士の意氣地もて庇護申せしもの、假令宰相殿の御頼たりとも、刀に掛けても御渡し申されぬ。是非に貴殿等、武士道の面目踏み潰す所存ならば、今日限り交り申さぬと、旗本一同よりの申聞此上我等力には及び申さぬ。』と、すつかり前言を食んで、武士にあるまじき不信義の回答を兩人から申送つて來た。

これでは半左衛門は奪ひ取られ、又五郎は依然として彼等の手で庇護れると云ふ次第で、宰相殿は全く久世等の術中に陷つた事になつてしまつたので、その立腹は一通りでない。かうなると事態が複雜になつて來る。

池田家の方でも、大名の面目上、彼等旗本の威喝に屈する事が出來ない。一家中はこの事で日夜評議を凝した末愈々最後の手段は、軍馬を率ゐて旗本八萬騎と一戰を交へんと云ふ事に決して、陰に出師の準備に取り掛つた。それと同時に宰相殿より、此事將明き申すまでは登城仕らぬと、幕府の老中迄申し出て、上裁を仰ぐ事にせられたので、尾張、紀伊、水戸、の三大納言初め、諸大名衆も仲へはいつて種々と双方を取鎭られたが、容易に事が纒らず、事態は益々險惡の波紋を擴げて、とうとう大名と旗本との對持となり、意地の張合となつて、危期は愈々迫つて來た。

斯くて、池田家近親の諸大名は相結んで宰相殿を援け、旗本の士を擧つて安藤を助けると云ふ具合になつて、兩々相讓らず、江戸八百八町は、いつ動亂の巷と化するかも知れぬとて、人心騷然、四民安き心もなく、流石將軍家もこれには大に頭を腦まされた。

さても勢の向ふ所堰くに術なく、今にも兵亂の勃發せんとした間際に、意外の出來事が動機となつて、さしもの大事件も一時小康を保つ事が出來た。それは一方　主人公を亡つたからである。

寛永九年四月三日、宰相忠雄卿には御病氣の爲め　俄に御他界遊ばした。（これには深き事情があるとの事である）一家中は悉く憂愁の淚を浮べて悲嘆にくれた、定めし萬斛の鬱

憤を抱いて逝れた事であらうと思うと、殊更に堪へられなかつた。……が……其涙の未だ乾かぬ内、又々池田備中守様の御棺を送る事になつたのである。

かく思設けぬ憂き事が重なつたが、就中一家中が斷腸の思に堪へなかつた事は、宰相殿が御臨終の砌、御舎弟等を枕頭近く召して。

「余は假令、備前一國を召し上げられても、苦しうない。又五郎の事はどこまでも上裁を仰ぎ、余が本望を遂げよ。」と血涙を浮べて遺言せられた事で、これを聞て臣下一同、思はず悲憤の眦を裂いて、飽く迄亡君の意志を貫徹しようと切歯した。

そこで御舎弟松平石見守輝澄松平右近大夫輝興殿から、再び幕府に嚴しく迫つて、上裁を願出されたので、動亂の火の手は又炎上らんとした。

幕府では驚て、三大納言殿密議の結果、此事件の裁き方を凡て松平阿波守殿に御内命になつた。

この阿波守殿は逝かれた忠雄卿の岳父で、蜂須賀忠政號は、逢庵と申し、阿波國徳島の城主で、當時智慧阿波といはれた程の器量人であつたから、半左衛門を自分が預かると云ふて、身柄を請け取り、大阪から阿波へ送る船中で密に斬殺して、海底の藻屑となし、世間へは頓死したと披露せられた。

幕府は又、阿波守の獻策によつて、旗本安藤等に又五郎を庇護置く事相成らぬと嚴命を下したから、我等は止むなく、又五郎の身邊に、各一流を得たる劔士十餘人を附けて、何處へか逐轉さしてしまうたが、幕府は更に所行不届とあつて張本人安藤、久世、阿部、等三人の者に寺入を命じたので、彼等は芝の寛永寺に、謹愼蟄居と云ふ憐れな末路に立至つてしまつた。

寛永九年六月、忠雄卿の長子勝五郎殿は、御年僅か三歳で封を嗣がれた。此君後、名を光仲と申し、池田家中興の名君であつた。

さて一時は天下の擾亂とまでならうとした此大事件も、幕府の裁で旗本等の處分もつき、池田家の方でも代が代り、いつしか時日の經つにつれて、其の火の手は鎭まつてしまうた、……が……すまぬのは數馬の胸の中である。過ぎし日、半左衛門江戸へ護送さるゝ折にも、手出し一つ得せぬ腑甲斐なさと、且その後、一向數馬に報讐の兆がないとて、世間では兎や角と非難する者もあつたが、これは亡君（忠雄卿）の深き御内意を守つて居たので、近頃心なき世評を聞くにつけ、數馬の心は常に亂れ勝であつた。

御世繼をせられ　翌月（九年七月）勝五郎殿は備前より因幡に御國替を仰付られ、封を因伯二州に受けられた。

此御國替を時機に、數馬は殿より敵討の御許可を得て、幾年月の思出深き岡山の城下を立退き、備前國兒島に移つて、敵、又五郎の行方をば聞糺したが、それぞと思ふ端緒も見付らず、心ならずもあだに月日を送つて居つたが。或日ふと、數馬の胸に浮かんだのは、又五郎の伯父河合甚左衛門が、大和國郡山の城主松平下總守殿に仕へて居ると云ふ事であつた、それは幸ひ、自分の姉婿荒木又右衛門も同藩中であるから、それを賴よつて行けば或は敵の樣子が判るだらうかと、果敢なき事を賴として、旅の支度もそこ〳〵に、その年の十月中旬過郡山をさして出立した。

道すがらの風物も、物思ふ身の數馬には一しほ行く秋の淋しさが胸にこたへて、言ひ知れぬ寂寞を感じた。それは果して、いつ、敵の在所を突止め得られるかと云ふ懸念が先立つからである。

數馬は「とやかく思ひ煩ひつゝ」夜を日に繼いで、五十里の道程を漸く四日目の黃昏時に、又右衛門の許へ辿り着いた。そして過ぎ越し方の數々を、涙と共に夜もすがら語り明かしたが、聞くにつけ就中、梶（又右衛門の妻で數馬の姉に當る）は女性の事とて、涙が多かつた。

「承つて我等も涙、亡君の御鬱憤、又、御許の心外、さこそと察し申す。然し、敵方には數多、附人もあることか。この敵御許一人では心許ない。緣に繋がる我等、必ず助勢して、本懷達し申させんが、ゆめ輕擧は大の禁物、望持つ身は一しほ苦勞に御座るぞ。」と、又右衛門は沈着なる態度で、數馬を誡め、義の爲に趣かん事を誓うた。そして思ふ所があつて、翌年の三月迄、數馬を我家へ留め置き、ひたすら武藝の修業を勵まして居た。

寛永十年、春も名殘の三月二十四日、又右衛門は深く決する所があつたので、永の御暇を藩公に願ひ出たが、君にも豫てより又右衛門の意中を察して居られたので、早速有難き御諚を賜つた上、願の筋は聞屆けられた。

かくて又右衛門は一家中に盡きぬ名殘を惜んで、妻子と數馬等を引連、攝津國にうの山田へ立退き、此所の澤治右衛門方（梶の妹婿）に妻子を預けて、又右衛門、數馬、並に家來河井武右衛門、岩本孫右衛門等主從四人は、四月二十六日未明に、江戸に向つて、愈、敵討の首途に上つたのである。

「鐘一つ賣れぬ日はなし江戸の町。」實に江戸は繁華な所である。その數多き町々を、何處をそれと當ともなく、四人は別れ離れに、日々、又五郎の行方を探し廻つたに、何の手掛も得られなかつたが、漸にして河合甚左衛門の在所をば突止めた。併し甚左衛門は本敵ではないので、唯彼が擧動に油斷なく心を配ると云ふだけで、外にとるべき手段はなかつた。そして四人は猶も探索を續けて居る中、夏も盛りの七月二十二日となつた。ところで、ふと聞き込んだのは翌る日の四ッ刻甚左衛門が急に京へ上るとの事であるから、必ずや又五郎を同伴せん、時こそ來たれりと、四人は互に勇み立ち、彼をば途にて討取らんと、その夜の未だ明けやらぬうちに、江戸の町をば後にした。

丁度その日の晝過、武藏國程ケ谷の宿場で待設て居た、甚左衛門と出會したが、目指す又五郎の姿は見えぬ。四人は、はつと、張りつめし氣合も拔け果てたが、さあらぬ躰に行違ひ悄然として再び江戸へ引返した。

その後。旗本屋敷はもとより、近郊近在の場末まで、隈なく詮索したが、更に手掛りなく、尋ねあぐみてその八月の末つ頃、江戸を立出で、物懷かしき大和の郡山に向つた。……が……此所にも敵の陰だになく、せん方なくて一先つにうの山田へ引揚げた。

寛永十一年彌生の中旬。時の帝の畏き詔によつて、公方樣方が御上洛になつた。もとより附添の御家人衆も數多入洛したので、若しや又五郎も都の邊を流浪はんかと、四人は京へ上り、日々都大路の繁街より嵯峨や御室の片ほとりまで此所彼所と探索に日數を費したが、これも徒勞に終つて、又々、山田の鄕へ歸つてしまうた。

其後人傳に、又五郎が有馬に湯治をして居るとの事を聞き込み、すぐ出向いたが、それは單に噂のみであつた。其所でふと先頃甚左衛門が郡山侯から御暇を戴いて、奈良のほとりで閑居て居る事を耳にしたので、其年の十月朔日の夜、人眼を憚つて、密に季秋の影淡き月を踏んで、主從四人奈良の都をさして急いだ。

ところが果して甚左衛門は、妻子と共に南都に住んで居たので。四人は互に姿を窶して、雨の夜も、風の日も、その邸まはりを付狙つて、樣子を探つて居ると、丁度三十六日目の十一月五日の夜に、敵又五郎等は慥に甚左衛門方に隱れて居ると云ふ事を突止めたので、四人は思はず手を取り交して嬉し涙に咽んだ。

數馬はかく敵を目前に突止めたので、今は猶豫ならずと、其夜直に甚左衛門方へ踏込んで、討果さうとあせつた。……が……又右衛門は。

「待たれよ數馬、御許此所を何處と思ふ。南都は物優しい長袖衆ばかりの土地柄、よし本意を遂げるとも見苦しき作法と存ずる。殊に又後々の御捌き方、懸念至極、かまへて早まる時ではない。』と。その無謀なる振舞を叱りつけた。

所が、その時は際どい時であつた、と云ふのは、又五郎等一行は翌朝、江戸へ下る準備を整へて居る事が知れたのである。これ幸ひ、一先づ彼等を道中筋まで送り出し、大名在國の城下で討取るのが得策であるから、其場所を伊賀の國内と云ふ事に決めた。そして若し敵を取逃してはと、見張のため、四人はその夜甚左衛門宅の塀外に身をかためて、寒き霜夜を徹したのである。

果して翌る六日の朝、四ッ時分に、又五郎等一行は用意おさ〳〵怠なく、江戸へ下る發程についた。

一行の順序は先馬、河合甚左衛門、次は又五郎、櫻井半兵衛（又五郎の妹婿）其他旗本よりの附人、供人等、供槍九本、鐵砲三挺、半弓三張、上下二十有餘人の同勢で、其の日の夜の八ッ時分に、奈良より七里程先の伊賀の嶋か原と云ふ所に宿つた。

又右衛門等は、彼等の後を、いつも七八町づつ後ばせに、見隠れに尾行て行き、其宿元を見屆け、本街道筋は敵に見咎められる恐があるので、町屋の裏側へまはり、道なき所を踏み破つて、彼等の目をかすめ、三町程先へ行き越して宿を取つた。

所が心なき此旅籠屋の亭主が、又右衛門等四人の擧動に不審を抱き、必定又五郎等に害を加へるものと睨んで、密に問屋の方へ此趣を内通した。問屋からまた、又五郎の宿元へ申傳へたので、臑に疵持つ彼等一行は、何となう氣遣しくなつて、宿の者等六人に不寢番を申付け、要心深くその夜を警めた。

さても又右衛門等は、今夜、宿の樣子の只ならぬを見て、いたく不安の念に驅れ初めた。若し今、敵方に覺れては一大事、事の破滅と、言を構へて体よく其宿を立退き、いとも峻しき闇路を辿つて、漸く上野の城下小田に着いて、宿を取つたのは、その夜も既に深更の頃であつた。

此宿で主從四人酒酌み交し、互に最後の名殘を惜み、翌日の手筈を打合せて、夜の引明を千秋の思ひで待ち焦れて居た。

翌くれば七日の朝、又右衛門は敵打の屆を上野城主、藤堂大學頭殿の町奉行所に差し出して、其出所を明にして置いた。そして何れも最後の身仕度を整へ、二筋道の所で、四人

兩方に分れて、又五郎の一行を今や遲しと待受けて居つた。
程なく彼等一行は（此日は先馬が町人であつた。これは矢張り又五郎の妹婿で昨夜島が原の宿で出會したのである。次が甚左衛門、又五郎と云ふ順序であつた）騎馬で上野の西端に差かゝつて來た。又右衛門は素早くそれを見とめて。
「見よ數馬。あの三番目の駒に跨るのが、敵、又五郎なるぞ。御許はあれを目當に、ゆめ油斷あるな。」と注意した。
敵の一行は目前に迫つた。そして鍵屋の辻（上野町鍵屋の辻に、今も昔を忍ぶべくその記念碑が建てゝある）を西に廻るその刹那。待ち設けたる四人は、一時にその面前に立塞がつた。數馬は、
「如何に河合又五郎。今を去る五ケ年以前、汝が手に非業の最後を遂げし渡邊源太夫が兄、同苗數馬、時來つて報讐のため、此所に待請けた。いざ尋常に勝負を決せよ。」と備前祐定の一刀を振翳して大音聲に名乘を揚げた。又右衛門も續いて、
「珍らしや、河合又五郎、同甚左衛門の御兩所。下肖荒木又右衛門保和、只今、義によつて數馬の助太刀申す。いざ何れも覺悟あれ」
と聲色自若として、申渡した、そして腰なる伊賀守金道の一刀に、彼の手が掛る瞬間。忽ち甚左衛門は胴切にせられて馬上より轉び墮ちた。かくも脆き敗を招きたのは、つまり武運の盡である。彼は元來武術に於いては群を抜いた達人であつたか。その乘馬が狂つたゝめ、僅か鯉口四五寸拔き放した丈りで、討取られてしまつたのである。
又右衛門は彼を討取るとすぐ。立騒ぐ一行の中へ切込んで、旗本の附人等と渡り合うたが、敵も味方も何れも一流の達人揃であるから、鋒鋩火を發すると云ふ樣な激しい切合となつた。然し、當時劍をとつては天下に並ぶ者なき又右衛門の手腕は、身邊十余人の敵に圍まれながらも、泰然として衆敵と對峙し、彼等に少しの隙も與へなかつた。
切合は方に酣になつた。又右衛門の腕は益々冴えて、彼等の大半を仆したが、數馬の事が氣づかはしくなつて、其まゝ後へ取つて返した。
一方、河合又五郎は、數馬の名乘も待たで、すはと計り馬上より飛び降り、槍をすごいて數馬と渡り合うたが、稍暫し切結ぶ内に、互に數ケ所の手傷を負うた。とかくする內、又五郎は斯くては果てじと、槍を捨て刀を拔いて、いらち氣味に切り込んで來た。此頃から敵方より數馬目がけて半弓をごし〳〵と射掛けるので、數馬は數矢を蒙り受太刀丈りとな

つて、余程危くなつて來た。
この危機一髪の所へ、又右衛門は駈け戻つて、數馬に聲援を與へた。その氣合に打たれて、敵の身体に隙が出來ると、得たりと數馬は付入つて、肩先深く切り下げた。……が……又五郎尚も屈せず、深手を忍んで奮鬪したが、遂に力及ばずとう〳〵數馬の爲に討取られてしまつた。

是より先、岩本孫右衛門、(數馬の忠僕)河合武右衛門、(又五郎の門弟)の兩人は又右衛門の指圖により、櫻井半兵衛に立向うた半兵衛素早く槍を取らんと馬首をめぐらしたが、兩人のため遮られたので、止むなく馬上より刀を拔いて飛び降りさま激しく切結んだ。
一体この半兵衛は十文字槍の名手で、槍一筋で五百石を食むと云ふ位の達人であつたが、惜い事には槍を取る暇なく、太刀打となつたので、兩人のためにとう〳〵切り伏せられ、卑怯にも、とある町家へ逃込んだが、深手のため、其夜の中に相果てた。
此切合には、敵の方でも、旗本の附人はもとより、槍持、草履取の末に至るまで天晴花々しく立働いたが、何れも又右衛門のために斬殺され、或は傷つけられて、憐れ敗慘の最後に終つた。

すが〳〵しき初冬の朝時ならぬこの騷動で、鍵屋の辻は見る間に修羅の巷となり、無慘や人馬の血は路上に漂うたが、約一時(今の二時間)ばかりして劍戟の音も收まり、後は檢視の役人衆の交通斗りで、再びもとの靜けさに歸つた。
かくてこの敵討は、爰に目出度その局を結んだ。時に又右衛門三十六歲、數馬二十七歲、武右衛門四十三歲、孫右衛門三十八歲であつた。そしてこれが爲數馬は深手薄手共十三個所。孫右衛門は十一個所。武右衛門は致命の深手三個所を負うたが。流石又右衛門だけは僅に薄手一個所のみであつた。
その日の午の刻四人の者等は一先、藤堂大學頭の家來、彥坂嘉兵衛(數馬の身寄のもの)其他上野侍衆附添ひて、嘉兵衛邸へ引取られたが、武右衛門は殊更の深手にて、手當の甲斐もなく其夜半に死んだので、上野念佛寺に懇に葬つて、法名を『双明劍剛居士』河井武右衛門清原道武と號した。後年、又右衛門、彼の忠義に報いんがため、其一子與一郎を女婿として、荒木の家を繼がした。さて彥坂嘉兵衛は、役目の手前、其夜登城して、敵討の次第を大學頭殿に言上し、主命により、又右衛門等を四十日程、我邸に、其後は藤堂式部に御預けになつたが、爰で足掛三年の月日は夢の間に過ぎてしまつた。

其内式部殘つたので、更に藤堂出雲守に預け換へになり。兎角する間に寛永も早や十五年となつた、その六月二十日に。幕府から又右衛門。數馬等の身柄を、藤堂大學頭に下さつたのを、更に池田家に貰ひ受ける事となつた。（斯うなるに就ては種々と込入つたいきさつがあるが長くなるから略する）また一方。敵方の生殘つた者等は加納藤右衛門に、其後。藤堂玄蕃に御預けになつたが、同七月十三日に何れも御構無く所拂と云ふ所置となつた。又右衛門、數馬等は永々のお預より解放せられて、其年八月七日に愈、伊賀の上野を後に因州鳥取に歸參する事になつた。今其當時の道中筋を、記錄より拔萃すると。次の如く其送迎の行裝が盛で、如何に警護の嚴であつたかゞ窺はれる。

寛永十五年八月七日に。伊賀の上野より伏見に被差送の次第、

一藤堂玄蕃持弓五十張。組騎馬二十人。自分騎馬五人同出雲守殿母衣騎馬四十人。彦坂嘉兵衛鐵砲頭三人。鐵砲九十挺、弓頭二人。弓四十張。步行頭一人。田中源兵衛步行衆二十人。

一數馬。又右衛門乘物、此外に明乘物二丁

右の通にて、伏見松平勝五郎（鳥取の城主）殿屋敷迄御送り被成候、勝五郎殿より御請取被成候人數、左の通。

横川治太夫父子　鐵砲二十挺
渡邊越中　鐵砲二十挺
伊吹源太兵衛父子　同
宮脇平太左衛門父子　持弓十挺
片山彌治兵衛父子　伊賀の者五人　鐵砲二十挺
松尾惣左衛門父子　伊賀の者六人
福田檀兵衛　田中六左衛門
遠山才兵衛　伴九郎兵衛
外に持弓二十挺

右の人數にて勝五郎殿御請取被成因幡鳥取に被遣候伏見よりの次第。

一川船三十艘

海船は松平新太郎殿（岡山の城主）同右近太夫殿より御出し被成候

一大　船

四十八丁立
三十丁立
船數大小合三十二艘

右の船數にて播磨國の內、しやこーと申す所に泊り、此所の守護より御馳走にて、草深き所をば下苅被仰付。尤代官其外侍衆御出し。道筋の山々へは遠見の者のぼせ、夜は夜廻り、所々に篝火を御焚被成候。是より鳥取迄三泊りにて、無事に着申候。

かくて十三日、鳥取に參着した。その夜。又右衛門は頓死したので、城下の深心山玄忠寺（今は鳥取市新品治町にあるが。寬永の當時は下臺町今の庚申堂附近にあつて、墓地が新品治町に分離して居た。其の後轉々して寺院を墓地の所に建立したものである）に葬り、その墓碑に

荒木住荒木又右衛門尉保和生年四十歲寬永十五年戊寅曆八月十八日卒ス
秀譽行念禪定門

と誌した。

又右衛門の頓死した事に就ては深き事情があつたので、世間へは斯く被露したのであるが、慥に晩年まで生存へて池田藩で武藝の教導をして居たとの事であるが、惜しいことにはそれを確めるべき記錄が見當らぬ。

數馬は歸參後、錄高千石に加增され（以前は七百石であつた）孫右衛門には新知を賜つた。其後數年たゝぬ內、數馬は寬永十九年十二月二日卒去し龍峯山興禪寺（鳥取市栗谷町）に葬り、法號を『勇勝院一岳玄了居士』と諡し、行年三十五。其當時の墓碑は打壞れ、現時のものは後年再建したものである。又忠僕孫右衛門の墓は光明寺（鳥取市寺町）にあつて河合武右衛門妻の墓碑と併んで、

一武淨心信士　寬文八年六月廿五日卒ス

と誌してあるから六十二歲まで長らへたものである。

嗚呼、又右衛門逝きてより、世遷り年かはり、百八十二年の歲月を閲したる今日、今尚世人の記憶に新にして、其の武は永く世に朽ちないであらう。（完）

發起人

代議士　由谷義治

鳥取電燈副社長　石谷良造

鳥取縣會副議長　濱本房藏

縣會議員　田中信一

鳥取市　松田秀彦

仝　龜本久藏

大阪市 野口榮次郎

岡山市 木下唯助

八頭郡社村 藤田富太郎

後援會

（イロハ順）

後援會長 鳥取市長 山村英太郎

市會議長 楠城嘉一

市會議員 西尾磯藏

仝 岡垣傳重

仝 尾崎篤次郎

仝　尾坂善藏

仝　大嶋久次郎

仝　横田元秀

仝　米澤安吉

仝　萬井源太郎

仝　米澤貞一

仝　吉村秀治

仝　谷口圭三

濱田金治

仝　高木貫道

仝　常田孝治

仝　山下仲

仝　山根貞義

仝　山本繁治

仝　松久常藏

仝　小谷信行

仝　青木源次郎

仝　君野順三

仝　北川菊藏

仝　森脇豊吉

仝　森田吉次郎

仝　本村憲一郎

仝　住谷岩藏

鳥取市有志　岩崎正文

仝　徳田平市

濱田金治

眞島信茂

仝　小田政美

仝　尾崎信太郎

仝　尾崎修三

仝　吉村徳平

仝　米澤喜男

仝　田中永治

仝　上田喜太郎

仝　兒嶋幸吉

仝　柴田秀藏

仝　網谷金治

仝　安引信藏

仝　佐々木常七

仝　木村清一

仝　由宇石治

仝　由谷節

因伯時報株式會社

鳥取新報株式會社

寄附芳名碑

一金參百圓ヨリ五百圓迄　八寸角　高一間

一金五百圓ヨリ千圓迄　一尺角　高一間一尺

一金千圓　以上　一尺三寸角　高一間一尺

八寸角

一金參百圓以上五百圓迄

住所

氏名

一間

一尺角

一金五百圓以上千圓迄

住所

氏名

一間一尺

一尺三寸角

一金千圓以上

住所

氏名

一間一尺

三十圓以上三百圓迄

住所

氏名